

28PA-pm257

リフィル処方箋導入における薬局の課題

加藤 典子¹, ○小林 典子¹, 藤本 和子¹, 岩田 紘樹¹, 山浦 克典¹ (慶應大薬)

【目的】2017年閣議決定の骨太方針において、一定期間内に反復使用が可能な処方箋である「リフィル処方箋」の導入を検討すべきであると提言されている。制度の導入にはリフィル処方箋を発行する医師側とそれを応需する薬局側それぞれの対応が必要となるが、制度導入に向けた課題は明確になっていない。そこで本研究では、制度導入における薬局側から見た課題の明確化を目的とし調査を実施した。

【方法】日本薬剤師会の「保健調剤の動向」で報告された医薬分業進捗状況から、平成28年度集計医薬分業率の上位3県（秋田県、神奈川県、新潟県）、下位3府県（福井県、和歌山県、京都府）を選び、ランダムに抽出した薬局1,000件を対象に質問紙調査を実施した。調査内容は、薬局環境、薬局で実施しているサービス、リフィル処方箋に対する認知度および見解とした。また、現行の類似制度である分割調剤に対する実施経験と見解についても調査した。

【結果・考察】得られた300件（回収率30.0%）の回答のうち299件を解析対象とした。リフィル処方箋制度の認知度は84.7%であった。制度に対する印象は5段階評価（最高5点）において、平均3.6点（標準偏差0.92）であり、4点以上の肯定的な回答者は52.8%にのぼった。この評価を薬局環境や薬局サービス内容等でクロス集計したところ有意な差は見られなかった。制度への懸念点として「導入時の混乱」（73.8%）、「患者アセスメントへの不安」（41.4%）を挙げた回答が多かった。また、現行の分割調剤に関して有用性は評価したものの、患者理解の得にくさと運用の煩雑さを訴える回答が多かった。以上より、リフィル処方箋導入にあたり、患者の理解が得やすく運用しやすい度作りが課題であるとともに薬剤師の臨床判断能力の向上を目指した取り組みが必要であると考えられる。